



# orero

## No.47 最近暑いね号！

世紀の珍獣2人が京都へ侵略(進学)しました！  
カワウソはバン格拉ディッシュで虐待されている！！

## 京都からの便り

神戸フリースクールのみなさまへ

この手紙が着く頃にはもう、新学期が始まってるのかな？  
私は京都に来てもうすぐ二週間。そのあいだに桜が咲いてもう桜の花びらが雪のように舞いおちています。

みんな変わらず元気ですか？青雲の入学式は終わったのかな？

私は大学生活、最初の一週間をおえたところ。何人かのクラスメイトと友達になれたけど、ほとんどの子が2才下なんよね～。私のことも18才やと思ってるんやろなっておもったら、自分でめっちゃ違和感あるわー。気持ちを若くしてがんばろう(笑)。来週からは授業も始まるし。

京都での一人暮らしは、なかなか快適よ。最初はさみしかったけど、もう慣れてきた。でもやっぱり、不安になったりさみしくなったりすることもあるって、テレビをつけてる時間が増えたな。大学が休みの時とかは、また里帰りするし、みんなに会いに行きたいと思ってます。

じゃあまたね～～



2004・4・8

木村 蘭 ヌリ

カンパあいがとうございました！

登尾 明彦	増井 真樹
大倉 節子	守屋 哲
坂口 和義	杉浦 昭代
鈴木 シゲ子	藤田 稔
車田 邦夫	小野 洋
大石 哲・寿子	忍出 利治
高野 幸嗣	西本 和代
高野 心く系	所 薫子

(順不同、敬称略)

メンタルフレンド派遣しまあ～あ！

『心の友』・・・なんて大げさなものではないけれど、  
「不登校してて、ひとりで過ごしてるのがつまんな～い」  
って思っている子どもたちのもとへ遊びに行く

おにいさん・おねえさんがフリースクールで待ってま～す！  
子どもたちの希望にあわせて、ピッタリの人を選びます。

顔合わせの上で決定しますから、ご安心を。

お問い合わせは、神戸フリースクールか  
不登校ネットワーク兵庫(078-366-0367)まで。

ホームページ <http://www.freeschool.jp/friend/>

あとかぎ

☆新学期がはじまって早2ヶ月になろうとしています。新高校生たちは久しぶりの授業とレポートの提出にそれほど戸惑うこともなく、楽しんでやっています。中学時代の不登校がまるでうそのようです。

☆そろそろ田植えのシーズンです。この日も淡路の岩城さんのお世話で6月中旬に実施することになりました。田んぼでどうなることになった足は海で洗ひ、帰路いつもの温泉に浸かって帰るぞうだと思ひます。詳しい日程などが決まりました。報告します。猫の手も借りたいとしますが、猫の手も借りたてきです。ご家族で参加いただけるとうれしいです。

☆フリースクール活動も教室の掃除からたづなけ、小口会計、予定表やチラシの作成、相談電話の対応、日誌、行事の段取り、訪問客の対応まで一人では何役もこなしてくれた木村ちゃんがいなくなつて(京都の大学に入学)。一時はどつなごとかと思つていたけれど、少しずつ慣れてきた今日この頃です。(なへ)

H.P - [WWW.FREESCHOOL.JP/KFS](http://WWW.FREESCHOOL.JP/KFS)

MAIL - [TOKASYA@HOTMAIL.COM](mailto:TOKASYA@HOTMAIL.COM)

お問い合わせ・TEL & FAX 078-366-0333

住所・兵庫県神戸市中央区下山手通8丁目8-10

**KFS**  
KOBE FREE SCHOOL

パッション

ひさしぶりにイエスを描いた宗教映画を観た。僕はイエスをパウロたちがイエスに冠したキリスト(救い主)という称号では呼ばない。イエスを神に祀り上げるのではなく、人間としてあの時代を鮮烈に生き抜いたその生きざまに驚き、感動する。35年前キリスト教の神学校を飛び出し、教団を批判して破門されても、その気持ちは変わらない。たえず胸にイエスのコトバや生きざまがこびりついていて、「ああ、あの人のようには生きれないなあ」「どうしてあんなに強く激しく生きたのだ」と考えこむことがある。あのときイエスは30歳だったという、僕はなんと彼の2倍も生きてしまったのになんにもできていない。

丘の上にある神学校で毎朝開かれる早天祈祷会でだれもかれもが、ベトナムの平和を口々に祈った。

アメリカが北ベトナムに恐ろしい攻撃をくりかえしていたときだった。そのとき僕は「祈りは行動の始まりのはずで、この人たちは祈れば事足り」としている、これはイエスの生き方とは「ちがう」と激しい憤りと虚しさを感じて神学校の宿舎を飛び出し、東京の山谷というドヤ街にもぐりこんだ。そしてそこでイエスのような生き方をしている二人の男に出会う。東京の話はまたの機会にするが、いまイラクをアメリカが攻撃している。ジョンレノンのつれあいである小野ヨーコが「Don't fight for Peace.」と叫んでいる。なんどもなんどもくりかえされる戦争、平和と民主主義のために争わないですむ方法はないのだろうか？

④

＜第三種郵便物認可＞

「でも、スクール側が用意したものを食べるのは意味がない。食事を通して、子供たちが自己いんごを学んでほしいにかった」と田辺さん。

食事前の参入は思わぬ効果を生んだ。

例えど、この「食育」を、側として、地域の「配」に「す」て「育」んでくれたと「居る」。

「食育」と「生きる」と「育」というのが田辺さんの持論。「食育の過程で、どんな人かわかり、食物を通して、それが健康に生きていく」がテーマ。手を「ほし」と「話」した。

4/16

神戸フリースクールと出会って6年が経つこの春、私は卒業の時を迎える。中2の時、周りの友達と上手くやっていく事が出来なくなり、学校から逃げた。そして、そんな自分に対する嫌悪感や将来に対する不安と戦いながら、不登校を始めた。中3になって一度だけ入った学校、教室、私はその圧迫感を含んだ空気に耐えることが出来なかった。それから、もう二度と学校へは行かないと心に決めた。

親はその事実を受け入れようと必死になつてくれていたのだと思う。その一方で、あきらめきれない気持ちもあつたのだろう。親の言葉がいつも皮肉っぽく聞こえたのは、そういう気持ちが含まれていたからじゃないかと思う。でもそれは、少なからず私を不安にさせたし、心を乱した。だから、干渉しないでほ

ておいて欲しかった。毎日、漠然とした無気力な時間の中で、次々と浮かび上がってくるやり場のない強烈な感情をどうする事も出来なくて、夜、布団の中で涙と一緒に流した。暗い宇宙にポンッとひとり投げ出されたような孤独と恐怖に襲われて、壊れてしまいうだった。助けを求めると相手もいない、どうすればいいかも分からない、絶望……。家での生活は、楽しいこととはなにもなく、心から笑うこともなくなった。

そんな生活に耐えられなくなり、中3の春、母が見つけてきた『もうひとつの「学校」案内』という本に紹介されていた神戸フリースクールを訪問した。本当は、もう友達なんて出来ないんじゃないかという想いがあつても、不安でいっぱいだった。でも、フリースクールのみんなはお互いを尊重し合い、自分の気持ちを押さえてくれて、いい子を演じなくても、あるがままの私を受け入れて

くれた。そしてなにより、学校なんて行かなくても生きていけるのだという事を教えてくれた。

フリースクールの中に自分の居場所をみつけれられたことで、少しずつ気持ちも落ち着きはじめ、不登校の時間を楽しめるようになった。色んな事に興味を持ち、挑戦していく気力も出てきた。フリースクールのみんなと冒険したり、外国に行ったり、バイトをしたり。

そして、私はいつのまにか子どもではなくなつて、子どもスタッフという立場になつていった。まだ自分自身不安定だし、中途半端に成長した私が居ることで、ほかの子の居心地が悪くなるんじゃないかと思

は、相変わらず微妙な存在だけれど、フリースクールに響くみんなの笑い声を聞いていると、幸せな気持ちになれるし、何よりパワーになる。このフリースクールで過ごした6年間、様々な経験を通してたくさんの方の素敵な人たちに会った。色んな世界を知ることができた。そして、その経験は、泣いてばかりいた弱い私に確かな成長をもたらしてくれたし、自分自身のなかにあるいくつかの可能性を見出してくれた。

一度立ち止まってゆっくりと周りを見直し、じっくりと自分自身と向き合う。私にとって不登校はそういう時間だったとおもう。その時間があつたからこそ、人が傷つくこと、自分が傷つくことに敏感であると思えるし、だからこそ人にやさしく、自分の信念に強く生きていけるのだとおもう。

この春、5年かかった通信制高校卒業を機に、大学への進学を決めた。

初めての受験は緊張したけれど、公募制推薦の一教科受験で得意の英語を生かすことができて、無事、志望の大学に合格した。母は涙を流して喜んでくれた。

大学では、臨床心理学を専攻したいと思つている。神戸フリースクールの活動に参加しているうち、心理学に興味を持つようになった。人のなかにある「心」というものをもっと知りたい。本当は、自分自身の心を知る鍵を見つけたためかもしれない。でもそれは、今の自分に必要なことなのだと思う。そして将来、自分がそうであつたように、思春期を戸惑いの中で生きる子どもたちの力になりたい、と思つている。そして、人間とは、生きるということについて、また現代社会の問題などについて、自分の考えを深めていくことを大学生活においての課題として、みんなにパワーをもらいながらがんばっていきたいと思う。



▲畑に住み着いた猫達。今春、4匹の子猫が産まれました。

## 僕と学校

小椋 新平 (19)

久しぶりにオーレロ通信に文章を寄せることがになり、高校ももうすぐ卒業できるとなった今、今までの僕と学校との関係を書かせてもらいたいと思います。

中学校 中学生の頃は、学校との係りは全くといっていいほど無かつたです。一年生のときの担任の先生が何回か家に来てくれて、少しだけでも勉強を見てもらっていた。それだけでは足りないであつたと学校の先生に勧められて、適応教室に行つてみたりもした。

小学校 小学生のころは不登校で一番悩みが多かつたです。僕が学校に行かなくなった理由は決定的なものではなく、いくつかの理由が重なって合つたことでした。そのうちの二つは、学校に行つて勉強するよりも外で遊ぶほうが楽しかつた、という単純なものでした。そして、一日でも休憩のために休むと（今でもあるかは知りませんが）ズル休みと言われて、とても学校に行きにくくなり、ズルズルと学校を休むようになりまし

が、基本的に勉強と呼ばれていることは、ほとんどやつていなかった。その分、多量に時間があり、色々な体験ができ、とても濃い三年間だった。本当に学校と縁を切つていた時期だった。その結果、中学校に行つたのは片手で数えられるくらいだ。

高校 高校生になり、定時制の学校にちゃんと通うようになって、色々な先生と出会い、様々な学校や勉強のおもしろい部分を発見できたと思う。じゃなければ筋金入りの優等生も通えなかつたと思う。

まとめ 最終的に、学校に行つてようが行つていまいが、自分が満足する生き方ができ目標に到達できさえしたら、どんな生き方をしてもいい、と想う今日この頃です。

